資料渉猟余話

その143

「栗里亭」は現存していた！

嶋　不濁

古い話ばかり追っているとたまにこういうこともある。とっくに朽ち果て消失していたとばかり思っていた「栗里亭」が移築されて残っているという話が飛び込んで来たのだ。

空襲をおそれた日夏耿之介が、昭和20年6月故郷飯田に戻り、東京から妻を迎えて山本村石曽根（竹村家）の持ち山の番小屋に入ったのが同年7月9日。それから10月14日に同村中平石田（金沢家）の雪後庵（後日命名）に移るまでのわずか3カ月余だが、日夏は石曽根の栗山の番小屋で過ごした。

持ち主の石曽根から4丁（約450㍍）程離れた4畳半と2畳（茅葺の番小屋）の小亭で、日夏は周囲の山々を「久里山」、亭を「看山荘栗里亭」、茅舎を「酔石庵」と称して、「草乃舎を酔石盧とし名づくから五勺の酒は飲むべかりける」と悦に入っている（「ほとどぎすを聴くの記」「栗里亭記」）。

また栗山の入口の「看山荘栗里亭」の下には「聞人乞丐此に入るへからす菊の花」と書いて掛けたという。この文言は有名だが、実は10年以上も前の「耐病悲記」昭和9年にある作である。

この石曽根の小亭は、実は天竜峡ホテルの離れとして使われていた数寄屋造りの茶室風の建物で、4畳半の部屋には不釣り合いなほど大きい鮮やかな中村壁の二間床がしつらえられていた。これらがは田国士、森田草平をはじめ奥村梨甕ら同級生や親戚や顔なじみも訪ねてくるし、敗戦後の地元メディアも放っておかなかった（「お城下日記」「栗里亭日記二」他）ので、その応対はさぞかし大変だったろう。

結局、寒さの苦手な日夏は冬を越せないと考えて、早々に道下の雪後庵に移るのだが、それはさておき、戦前戦後の記念すべき日夏の田舎暮らしはこの栗里亭から始まったのだ。日夏研究の上ではもちろん重要だが、小亭が天竜峡ホテルの離れというのであれば、昭和3年4月大磯から紀州徳川侯の別邸を移築した折の離れなのか、とその異同も気になるところであり、地域の文化史にとって貴重な建物であろうと思われる。小生が『黄眠先生が行く～日夏耿之介幻影』（2015年）をものした時も、栗里亭跡には石曽根の現当主竹村道生さんに案内していただき、またその後も何度も栗里亭（跡）は訪ねている。しかしわずかに土台の石組みはのこるものの、建物は跡形もなかったし、取材した関係者からも移築の話はなかったので、朽ちて土に帰ったものと思っていた。

昨年秋口にひょんなことから「移築」の話を聞いて、その後、移築された「栗里亭」を確認し、竹村道生さんにも確認してもらうと、「幼い頃何度も足を運んだ場所であったので、栗里亭に間違いがないが、移築されたことについては全く知らなかった」という。話を詰めていくと、日夏が雪後庵に移った後の栗里亭には道生さんの大伯父にあたる方が昭和27年まで住んでいたが、その後昭和31年頃に日夏と親交のあった村内の篤志家が石曽根から譲り受け、移築したらしいことがわかった。日夏の年譜を繰ると、昭和31年9月に日夏が東京から飯田市の愛宕神社境内の新居に越してくる時期に符合する。

しかし移築からすでに60年余の歳月が流れ、栗里亭はもはや朽ち果てるのを待つしかない状況である。

昭和61年に山本に居を移した高原富保・須美子夫妻がたまたま栗山の住んだこともあって、地元の菓子舗船橋屋の原昌弘さんが茶室尺庵の主でもある高原富保さんに新作の栗菓子の命名を依頼したところ、日夏ゆかりの「栗里亭」と名付けてくれたという。飯田市の3人しかいない名誉市民の第一号である日夏耿之介であるが、今では船橋屋さんの菓子をいただきながら、在りし日の日夏を忍ぶしかない。聞き記す所以である。

移築されて残っていた栗里亭（サッシは移築後）

中村壁の二間床